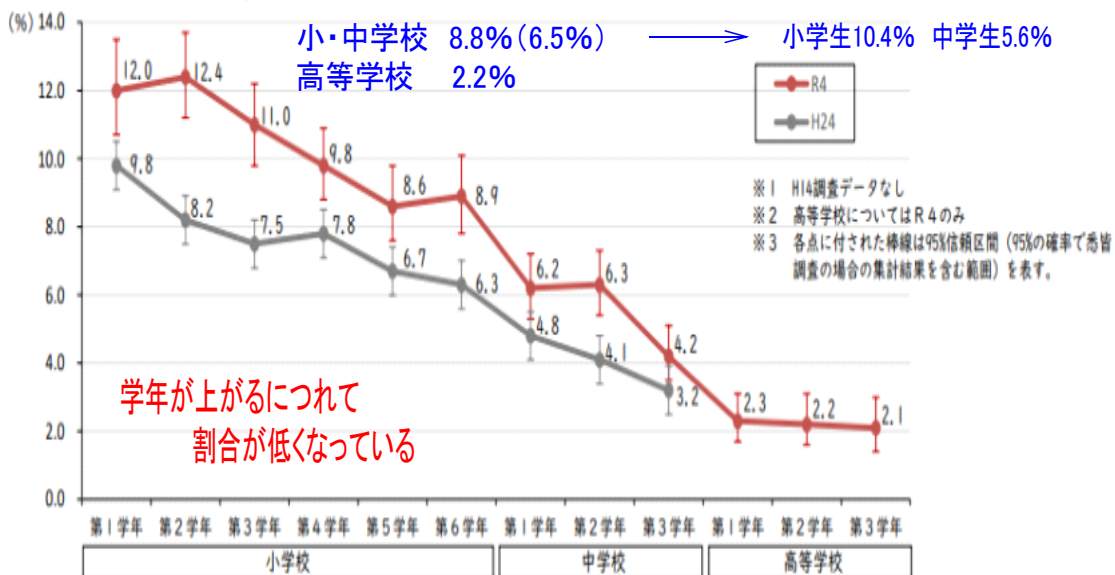


「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「本人の自覚と周囲の理解が大切」

＜「学習面又は行動面で著しい困難を示す」とされた児童生徒の学年別の推移＞



昨年12月、通常の学級に在籍する小・中学生で、学習または行動面で著しい困難を示す児童生徒の割合が8.8%と発表された。2012年の前回調査から2.3ポイント増え、35人学級であれば3人ほどの割合となる。文科省の担当者は増加の要因について「保護者や教員の発達障害への理解が進み、対象者に気付きやすくなった」と分析した。

私が注目したのは、学年が上がるにつれて割合が低くなるほか、小学6年から中学1年、中学2年から中学3年、そして、中学3年から高校1年の移行期に割合が大きく低くなっている点である。

【考えられる理由】

- 1 幼保→小→中→高と「個別の指導計画」等の引継ぎがされ、継続した支援ができています。
- 2 受検や進路先選択を通して、得意・不得意を知るとともに、自己理解が促進される。
- 3 環境の変化に伴い、本人が変わりたいという気持ちが強くなる。
(例：不登校の生徒が新しい環境に適應する、好きな部活動で力を発揮するなど)
- 4 互いに認め合い、支え合い、受け入れるなど、周囲の生徒の多様性理解が進む。
- 5 専門高校では実習を通して自己肯定感が高まり、就労を目標に努力できる。



とれたて直送便



「周囲の理解を促すヒント」

「リンゴが好きな子、ミカンが好きな子、いろいろいるね。もし、先生が全員にリンゴをあげたら、リンゴが好きな子はうれしいけど、リンゴが嫌いでもミカンが好きな子はうれしくないよね。だから、先生は、みんなにそれぞれ違ったことをして、その子が一番うれしいことをする。それは、先生があなたたちを大切に思っている印なんだ。だから、先生が他の子にあなたと違うことをしていても、どうして私にはしてくれないのと思わなくてもいい。」

必要なのは、どの子にもその子に合った特別扱いをしていることを子どもたちに実感してもらう学級の風土づくりである。そうすれば、個別の配慮が必要な子どもに特別な対応をしているときも、その子に必要な対応としてみんなが認めていける学級となる。